

フリードリヒ・ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽』における芸術と認識の一致

石橋 諭 (社会学研究科 修士課程)

本発表は、1873年のフリードリヒ・ニーチェの出版されなかった未完の小著『道徳外の意味における真理と虚偽』（以下『道徳外』とする）の芸術と認識の関係性を、その言語論、真理観を考察することで明らかにする。

通例として3つの時期に分けられるニーチェ思想の中で、『道徳外』は初期思想に含まれる。『道徳外』では、初期思想ですでに真偽に関して後期と類似した思想が現れるため、初期の特異な著作として度々言及されてきた。1970年代フランスの研究から一般に広まった初期のバーゼル時代のレトリック講義や言語論への関心においては、『道徳外』は全著作で唯一のまとまった言語論として再度注目され、中期、後期思想を含むより広範な比較や、処女作『悲劇の誕生』との比較を中心に初期思想の中で位置づける考察が生じた。しかし、特に初期作品の中での『道徳外』の位置づけは、主に『道徳外』以前の『悲劇の誕生』やそれ以前の音楽と言葉に関する断片や講義との比較が中心であり、同じ初期思想にあり『道徳外』とほぼ同時期かその後の『反時代的考察』との関係は考察の中心とならなかった。

このような研究の流れの中で、本発表では、『道徳外』の内在的読解を通じて、言語論とそれと密接に関わる真偽観を整理し、その矛盾を明らかにしたうえで、『道徳外』が矛盾を自覚した上で芸術と認識の一致という遊戯の方向を持っていることを示す。これにより、顧みられることの少ない『道徳外』以後の『反時代的考察』との関係を位置付け、『道徳外』を初期思想においてより適切に理解するための準備とする。

具体的な考察方法として、まず『道徳外』の真理観を言語論との関係から示す。『道徳外』で真理は二つの意味で用いられていた。一つ目の真理は、言表が物自体と対応するという意味であったが、この言表を構成する語は、神経刺激→像→語の二度の全く違う領域への転移により生じるという主張により、この真理は不可知、推論不可能であり追及の価値のないものとされた。二つ目の真理は、言表の現実的なものとの対応関係が、言語の立法とその慣習化によりその起源を忘却して固定化、自明化したものを意味したが、ニーチェはこれに対しても否定的だった。そのため、ここで意味する真理観を『道徳外』という著作の主張そのものにも適応すると、もしニーチェが自身の主張を真として伝達しようとしていたのなら、それは真とせず自己言及的な矛盾に陥ることが指摘されてきた。

本発表では、このような『道徳外』の真に関する主張の矛盾は、1 『道徳外』の言語論と同時代の遺稿集の文体への言及からして、ニーチェによって自覚されており、さらに2 矛盾を自覚しながら言葉によって主張することが、『道徳外』において芸術と認識がともに働く遊戯として肯定的に評価されていることを示すことで、『道徳外』が認識と芸術の一致への方向を持つことを示す。